
真・恋姫無双 この身、孫呉の為に

アナホリアの傭兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 この身、孫呉の為に

【Nコード】

N4629Z

【作者名】

アナホリアの傭兵

【あらすじ】

江東の虎、孫堅が猛将黄祖に討ち取られ、その亡骸は呉へと渡されたが孫堅の持っていた孫家伝来の宝刀 南海霸王 は紛失し、さらには孫堅の死を好機とみた袁術に呉の領土を奪われてしまう。孫堅の意思を継いだ孫家の者たちは胸に誓う

母の、主の、友の仇を討つと

孫家の誇り、南海霸王を見つけ出すと

孫呉代々の土地をいつの日か必ず奪い返すと

誓いから約二年の後、世が乱れ 天の御遣い などというものが
囁かれるようになったころ 建業を治める孫堅の娘孫策
とその重臣

達の前に1人の青年が現れ突然言った言葉 「俺を配下に加えて
欲しい」

いきなり過ぎる青年の言葉と瞳から感じる強い意志に興味と不信を
抱く

孫策達に青年は一振りの剣を差し出した

孫堅死後失われていた

南海霸王 を……………。

これは、とある事情を抱えた青年と孫家とその家臣達の物語

注意事項

〔注意事項〕

この作品の主人公はオリキャラになります、一刀君はかませです（かなり酷い扱いです）またオリ主の過去や能力設定も作者の妄想によって酷く改竄されております。オリ主 t u e e e e e 要素やアンチ一刀要素、オリ主によるハレムや残酷な描写もありますので苦手な方は注意してください。

この作品は文才皆無の作者が思いつきと気まぐれで書いている駄文です・・・

3

三国知識もかなり薄いので地理や自系列、合戦関係などはかなりいい加減です。

文章書くのも初めてなので至らぬところだらけですが皆さんの暇つぶしにでもなったら幸いです。

評価・感想は喜んで拝見しますが誹謗中傷は勘弁してください・・・
・作者の心はあなたの想像の三倍は脆いです・・・orz

序章

深夜 月明かりを頼りに荒野を歩く1人の男がいた

背丈は180を軽く超える長身に無駄を削ぎ落とし鍛え上げられた肉体、端正な顔立ち とこれだけ聞くと女が寄ってきそうなのだが浅黒い肌のいたるところに刻まれた傷や傷んで色素の抜けたような白髪、猛禽の様な鋭い眼、さらには背中に背負った巨大で武骨な剣とあいまって近寄りがたいことこの上ない容姿だった……もつとも今この場には人つ子一人いないのでどうでもいい話ではあるのだが。

「ようやく見えてきたか……」

男は感慨深げな声をもらし遙か先にある目的地を 建業を見据えた。

「やっと始められるよ、親父」

静かに目を閉じ脳裏に浮かべるのは今は亡き父の顔 そして、宝剣をを振るう勇壮で美しい妙齡の

「必ず貴女の思いを伝える。そして身命を賭けて恩に報いてみせる
さん」

男が呟いたその名は風にさらわれかき消えた、その呟きを最後に男は口をつぐみ建業へと歩き出した。

建業から二里ほど離れたところに二人の女性が居た、1人はまだ年若くもう一人は妙齡の女性、呉王孫策と孫呉の宿将黄蓋である。共通点はどちらも褐色の肌で美しく色気がある。といったところか。

年若い方―美しい桃色の髪風になびかせ孫策がもう一人　黄蓋に話しかける

「あーもう！春だつてのに肌寒いわねなんとかしてよ祭」

「無茶を言い申すな、そんなものどうにもならん……まあ確かに肌寒いのう、気候が狂つとるのやもしれん」

至極当然の答えと気候が狂っているという見解に孫策は不満と呆れの混じつた顔で答える

「官匪の圧政、賊の横行、おまけに飢饉の兆候まで出てるしね……世も末よねーホント」

「うむ、あげく王朝では宦官が好き勝手にやっておるからのう……賊に身を落とすものが続出するのも当たり前じゃろうて」

「真面目に生きるなんてやっつてられない！つてね、ま戦乱は望むところよ。乱に乗じれば私たちの野望も達成しやすくなる」

野望　　穏やかではいその言葉に　黄蓋は短く強く頷いた
「うむ」

「戦乱の兆しも見えてきた今、早く袁術の馬鹿から独立しないとね」
そう言った孫策の顔には初めのおどけた様子はなく強い強い意志が
うかがえる

「堅殿の死後うまく我らを組み入れたつもりじゃろうが……いい
加減あの馬鹿面も、うんざりじゃしもう」

孫呉の独立　　先代の孫堅が黄祖によつて討ち取られ、それが
きつかけとなり呉はその領土を奪われ

孫家伝来の宝刀は失われ妹達ははなれた地に軟禁状態　　孫呉の
誇りは、地に落ちた……

だがいつまでもそれに甘んじるつもりはない、領土も宝剣も誇りも、その全てを取り戻して見せる、
そう誓ったのだ変わり果てて帰ってきた母の亡骸に

「そういえば祭こんな噂しってる？」

しばし沈黙が流れ　その沈黙を破るように明るくおどけた口調で孫策が話しかけた

「どんな噂じゃ？」

「黒天をきりさいてゝなんたらかんたら・・・なんだっけ？」

「ああ天の御使いが現れるとかいう胡散臭いアレじゃろう？」

それがどうした　といわんばかりの返答に孫策はつまらな～いなんぞ知ってるの～？と文句を言っている

「なんでもなにも有名な噂じゃよ管輅とかいう似非占い師の占いじやな・・・なんでもその御使いとやらが戦乱を治めてくれるらしい」
そういった黄蓋の口には笑みが浮かんでいる　馬鹿馬鹿しい、と
いった笑みが

「まあ、そんな占いが広まっちゃう位乱れてるってことね」

本来なら妖言風説の類でしかない話題がここまで広まっているというところが今の漢王朝の腐敗を表しているともいえる。

「うむ・・・ 偵察も終了した、そろそろ帰らんか？策殿」

「・・・」

黄蓋の問いに孫策は答ええない無言のまま遙か先を見ている

「・・・何かあるのか？・・・策殿？」

その問いにも無言で彼方を見据えていた孫策だが突然元の様子に戻るとようやく口を開いた

「・・・うーん、何かいる気がしたんだけど・・・何にも見えないし・・・でも何か引つかかるのよね」

孫策に言われその方角を見やるが　何も無い、あるのはただの夜の荒野だ

「ふむ・・・策殿の勘は馬鹿に出来んからのう・・・妖の類やもし

れん、早く引き上げるとしよう」「
えーと不満げな声を漏らす孫策の首根っこをつかんで黄蓋は建業へ
向けて歩き出した

しばし歩き建業入口までついた二人を褐色肌に理知的な瞳の女性が
迎えた

「おかえり雪蓮」

雪蓮 孫策のもう一つの名、一人一人が持つ神聖な、限られた
人間のみに預ける特別な名前 真名

孫策はもちろん黄蓋にも目の前の女性にもそれはある、これを呼び
合う間柄とはつまりよほど親しい、あるいは信頼関係にある、とい
うこと。

「あら、お出迎え？冥琳」

冥琳 それが目の前の女性、周瑜の真名だった

「ええ、帰りが遅かったから・・・何かあったの？」

「ううん、特に何も」

なかった、そう言おうとし孫策は背後に感じた気配に勢いよく振り
向いた、隣では黄蓋も同じように振り向いていた

「な、何？どうしたの？」

二人の突然の行動に驚いた周瑜は目を細めて薄闇を見る 　そ
こにはぼんやりと人影があった

「誰か来るわ・・・」

「うむ・・・かなりの使い手、じゃろうな」

二人の顔には周瑜異常に緊張が見える だがそれも無理はない、
二人が感じ取った気配、

文官である周瑜には分らない、自分たちと同等、あるいはそれ以
上の、武人特有の強い気配

「近づいてきてるのは1人、……あのとき感じた違和感はいつだったのね」

「の、ようじゃのう……しかし儂も策殿が気づかんかったということはおそらく気配　　氣を殺しておつたのじゃろうな」

この距離まで気付けなかったとは　　と黄蓋は続ける

黄蓋の言葉に頷いた孫策はぺろり、と唇を舐めた、その目には適度な緊張と高い高揚がうかがえる

気配を殺していたのにそれを解いた、つまりはこちらに接触の意図があるということ

「さーて何がでるかしら、妖なら即殺してあげないと」
応戦する気満々で剣を抜いた孫策を見て黄蓋も己が弓、多幻双弓を構える

やがてゆっくりとこちらに歩いてくるそいつはついに容姿をはっきりと確認できる距離にきた

その風貌を観て二人が思ったのは……
「男……?」

そう、近づいてきたのは男だった、長身、浅黒い肌に白髪、体中にあるであるう傷、鋭い目……
体は一目見て分かるほど鍛え抜かれており予想通り相当の使い手であることがうかがえる、背中に背負った巨大な剣も武骨ではあるが相当の物だと見える……だからこそその疑問だった

はっきりいって今の世の中は女尊男卑だ、武官にしる文官にしる実力者のほぼすべてが女性であり男性は下級士官止まりがせいぜいだ、孫策も黄蓋もだが自信と同等以上の男など見たことが無かった……

今日この時まで　　だが
すでにいつでも斬りあえる距離に男は居る、二人はは武器を握る腕

に力を込め

力が抜けた……だって……しかたない……あれほどの威
圧感を持って現れた男が

二人がかりで挑む、と言葉を交わすまでもなく決めざるをえなかつ
たはずの強敵は

地に伏せ深々と頭をさげていたんだから

「孫伯符様とお見受けします、どうか俺　私を配下に加えて下さ
い！」

??????

??????

??????

何を言ってるんだこいつは？

突然すぎる男の言い分に武器を構えていた二人はもちろん緊張した
様子で後ろにひかえていた周瑜もあつけにとられている。三人にを
よそに男は下げていた頭を上げ　目の前の孫策を見つめている

いち早く混乱から回復した孫策が男の顔を正面から見、整った顔
立ち鋭い目……それはどうでもいい、ただの身体的特徴に過ぎ
ない、孫策が一番感じたのは意思　どんなものは分からない

少なくとも敵意ではないように感じるが、強い、強い意志

分からない……敵意はない野心も感じられないだが実力は間違
いないであろうこの男が何故突然配下になりたいなどと言っている
のか、士官したいならもつとまっとうな方法がある少なくともこう
やって夜にいきなり現れて言うよりはよほど心象もよくなるのだ
それが解らないほどの馬鹿にも見えない

目の前の男に興味と疑問を募らせていくなかで不意に男の持つ剣に
目がいった、背の巨大な剣に気を取られて気付かなかったが腰に剣

を指している・・・もつとも布に巻かれておりどのようなものか分からないが　分らないが気になる、気になって仕方ない、仕方ないので尋ねた。

「ねえ貴方？その腰の剣・・・見せてくれない？話ならその後で聞いてあげるから」

「・・・」

男は答えず、私の顔を静かに見つめている　だんまりなら力づくでも　そう思った孫策に

「やはり、親子なんだな・・・」

そういつてゆつくりと、腰の剣を手に掛ける　とここにきて

ようやく混乱から覚めた黄蓋と周瑜も

男の剣に目をやる、三人の視線が剣に降り注ぎ　瞬間、時

が止まった

三人の視線は正体を表した剣に釘付けになっている、誰一人、言葉発さない、発せない

男の手によって目の前に差し出されたその剣は　失われた
はずの　南海霸王　だった

序章（後書き）

はい、主人公視点が最所だけですね、次以降はちゃんと主人公視点も増えます

読みづらい上に表現も微妙だけどゆるしてね><

ps・作中で出てきた距離の単位の 里 ですが一里≒400mほどと考えてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4629z/>

真・恋姫無双 この身、孫呉の為に

2011年12月16日01時53分発行